

土師神楽座

土師神楽座は、大正十一年に土師・老松神社に奉納するお神楽を継承・保存することを目的に結成された団体です。

春の大祭では、毎年境内に作られた舞台で、「真榊」から「岩戸」までの計七つの舞が奉納されています。これらの舞は、現存する日本最古の歴史書として有名な「古事記」がもとなっていて、そのため、舞の題材となっているそれぞれの物語を少し勉強して神楽座の舞を見ると、また違った面白さが味わえます。

お神楽には、様々な道具（鈴、榊、太刀、御幣など）が登場し、「天神」の舞では弓矢を持った天神が、東西南北それぞれに矢を放ち、災厄を祓い除けます。これら放たれた矢は、お正月に神社などで見かける破魔矢と同じで、家に持ち帰れば今年一年、無病息災・家内安全となるとされ、昔から見物客の間で取り合いとなりました。また、お神楽のなかには、面を着けて行う面神楽と呼ばれる舞があり、打ち出の小槌で有名な釣り竿と鯛をもった恵比寿様（正式名・事代主）が登場する「事代」は、昔から子どもたちに大人気の舞です。

また、宮崎県は高千穂の天岩戸の伝説で有名な「岩戸」に登場する天手力男や、「海神豊姫」の舞に登場する海神などの威圧的な面での舞いには、小さな子どもは怖がって、舞台に近づけないほどの迫力のある舞が行われています。

の音が境内に響きわたります。

この「ノリ打ち」が終わると、八人の青年が杖を持つて舞う「杖つかい」が始まり、この「杖つかい」が終わるころ、二頭の獅子が舞い始め、この舞を「杖楽」といい、唐を出発し、東シナ海を威勢よく渡り始める様子が演じられます。

次が、いよいよ東シナ海を渡っている最中を演じている「獅子楽」で二頭の獅子が荒れ狂う波の中で戯れ合い、遂には雌獅子が疲れ果てて寝込んでしまいます。

最後に疲れて寝込んでいる雌獅子を雄獅子が起こし、励まし合って二頭仲良く老松神社に辿り着き拝殿へと登る「竜絵」で獅子舞は終わります。

上土師獅子舞保存会では、穂坂治夫頭取を筆頭に副頭取、楽（笛・太鼓等の担当）八名、獅子組（獅子の舞手）十二名と、地域の子どもたちで春、秋の大祭での奉納にむけ日々練習し精進しております。今後とも皆様のご声援よろしく願います。

【参考】歩こうふるさと桂川（桂川町郷土史会）



放たれた矢に集まる人々【天神】



はくがとる！わたしがとる！



「どったぞ〜！」



「さあ〜撒き餌の恵の餅じゃ〜！」【事代】



「こっちにも撒いて〜！」



恵比寿様（事代主）に釣られる子どもたち



怖いよ〜！
【海神豊姫】



荒波を渡る場面を演じる【獅子楽】



【杖つかい】を舞う上土師の青年



戯れ合う雄獅子、雌獅子



力強いばちさばきの親
（子どもたちのまとめ役）